

終焉の姉妹 上

千田夏光

新日本出版社

終焉の姉妹
上

千田夏光

千田 夏光（せんだ かこう）

1924年 大連に生まれる

毎日新聞記者を経て、現在、著述業。

主著『從軍慰安婦（正・続）』『從軍看護婦』『禁じられた戦記』『皇后の股肱』『俘虜になった大本營参謀』『未婚の母』『性的非行』『暴力非行』『皇軍「阿片」謀略』ほか

現住所 東京都江東区亀戸2の6の3の602

終焉の姉妹 上

1980年5月30日 初 版

定価 940円

1981年10月5日 第9刷

著 者 千 田 夏 光

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(478) 3311(代表)

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

終焉の姉妹 上 目 次

非国民監視員 5

宮の原陸軍病院 80

長崎の土 143

疼 痛 210

終焉の姉妹
上

『赤旗』一九七九年五月十六日より一九八〇年一月三十一日まで連載

非国民監視員

或る情景がある。

日時、昭和五十三年（一九七八年）七月十二日夜。夕方からみように風の強い夜であった。

場所は――、

横浜から東南へ、二十分ほど私鉄でいくと、うねうねコブのような丘陵がつづく、そのコブのうえに肩よせあいたっている十数棟の公営アパートの一室。

もっと正確に書くと――夜というのは、あと三十秒で“午後八時”になろうという時であり、一室とは、建てられてもう二十数年、壁のあちこちに黒ずんだシミが浮ぶ、その茶ノ間（四畳半）であった。

登場人物は、その家（谷田貝家^{やたがい}）の長男新次郎と長女洋子の二人。長男といい長女といっても“きょうだい”は二人きり。兄の新次郎は十九歳、新聞配達をしながらW大学文学部にかよっており、妹は十五歳、准看護婦になろうと、その方面の定時制高校へいつている。

それはいい。

二人は、もうどれくらい前からだろう、テレビの前にすわり、その上においた小さな目覚時計の秒針とにらみあっていた。眼は乾いている。錆色の時計だった。二十九秒、二十八秒、二十七秒……秒

針はみるみる「午後八時」にせまっていく。ついに二十秒をきった。十九秒、十八秒……十秒前になった。兄の新次郎が洋子をふりかえった。大きく氣息をすって、「いいわよ」というように洋子はうなずいた。三ッ編のお下げがかすかにゆれた。八秒、七秒……三秒前になったとき「ガチャッ」新次郎が、力をこめて卓袱台の上のビデオレコーダーの録画ボタンをおした。

この物語は、ここからはじまるのである。

ビデオレコーダーは、その日の午後、アルバイトでためた金を出しあつて、二万円の頭金をはらい、残金は二十回ばらいという約束で横浜から買ってきたばかりビカビカの新品だった。配達をたのむと翌日になるというので、二人で担いできたのだった。

午後八時。

心をえぐるような音楽にのってブラウン管に『子供たちは七ツの海を越えた』そんなタイトルが浮んだ。それは、敗戦直後の昭和二十二年二月に設立された「混血児」専門の孤児施設『エリザベス・サンダース・ホーム』に、あるとき預けられるという形をとり、あるときは棄てられるという形で託された米兵との「混血児」のうち、海外へ養子として貰われていった子供たちの、その後を、追っていくドキュメント番組だった。

二人は知っていたのであった。今夜の、この番組のなかに、自分たちの「異父きょうだい」が出てくるということ。異父兄か異父姉かは知らないが、自分たちの母親が、自分たちの父親と結婚する前、なんらかの事情で米兵との混血児を生み、そのホームに預け、さらに、なんらかの事情でそこから海外へ養子にやっていたことをである。

どのようにして二人がそれを知ったかは後にゆずるが、いまひとつ、二人の父親は、二人と母親をすてて七年前に家を出たまま行方不明になっていた。いらい母親は横浜の私立M病院で雑役婦をしな

から二人を育ててくれた。二十四時間勤務で三日おきに宿直勤務のある仕事で、その夜は、その宿直勤務番で、この時間は寝たきり患者の汚物にまみれた病衣や寝具を洗濯しているはずだったが、人知れず「その子」の成人した顔を見たがっていることである。

そうなのだ。新次郎と洋子は番組に出てくるはずの、その「異父きょうだい」を録画し、翌日の昼すぎ帰ってくる母親に見せようとしているのであった。十分、十五分……、番組はどんどん流れていく。ゴトゴト、たてつけの悪い窓枠を鳴らし風は通りすぎつづけていたが、二人はまじろぎひとつしなかった。必死にもとめていた。母親に、眼でもいい、鼻でもいい、どこか似ている「ひと」はあらわれないかと。

さらに、五分、十分……。

ブラウン管へはつきつきと、海を渡らされていった「混血児」いや、いまは「混血大人」となった、白い顔、黒い顔があらわれては消え、消えてはあらわれていた。

三十二歳になるという黒人兵との混血大人は、「日本では米兵との間に生まれた子供だからというだけの理由で受け容れてくれなかった、私は間違いない日本人だというのに」と言い、「それよりね、私たちが何をしたというの、私たちがどんな悪いことをしたというの」訴えながらボロボロ泣いていた。

シカゴに住み二児の母親になっていたが、その子供たちへ日本式に茶碗へ白いコメの御飯をよそい生卵をかけ食べさせていた。彼女が『エリザベス・サンダース・ホーム』にいたとき一番好きで毎朝おねだりしていた食べ物だといった。新次郎と洋子の眼からも大粒の涙が流れていた。ゴクリと鳴ったのは洋子の喉だった。

「うまくやっているよ」カメラに向かって淋しそうな笑顔をしいてつくってみせた青年は、転々と職を

かえ、いまは旅客機のスチュワードをしているといった。

「う、う、うっ」

二十数年ぶりにたずねてきてくれた沢田美喜さん、あの敗戦後の混乱と飢餓のなかで昭和二十二年二月一日この『エリザベス・サンダース・ホーム』を創立し「混血大人」からいまも「ママ」とよばれている彼女にすがりつき嗚咽の声をあげる黒い青年もいた。二十分、三十分、新次郎はいくどか頬をぬぐい、洋子の膝のうえは黒いしみで濡れていた。

その新次郎がさらにいくどめかの頬をぬぐった直後だった。

「洋子、あ、あの人じゃないか」

喉をつらぬくような声をあげ指をさした。

「そ、そうよ、ほら、あの横顔、そっくりよ、お母さんと。お姉さんだったのね」

それは女性だった。三十三歳で、いまイギリスに住み映画関係の仕事をする男性と結婚、二児の母親になっていると、静かな声で語りかけていた。白人兵との混血児で、名前は「マーガレット」とも説明されていた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんにも額のところが似てる」

洋子は、もう泣いていなかった。

そのころ、二人の母親、谷田貝キヌ子は横浜の私立M病院の宿直室の長椅子に放心したように坐っていた。

私立病院とはいえ病床数四十一の総合病院で患者の半分ちかくは体の不自由な老人で、彼女の仕事のひとつは、その患者の使いふるした成人用オムツや汚物にまみれた病衣を洗濯することだった。汚物のこびりついたオムツや病衣はそのまま洗濯機へ入れることができない。水で、手で付着した汚物

のひとつひとつを洗いおとさないとならない。これまで「私はもっと汚なか仕事だとしてきたとよね」「そうよ、それにくらべたら、この仕事はやればやるだけ患者さんに喜んでもらえるものだもの、うれしいじゃないかね」自分で自分に語りかけ、自分で自分に答えながら、夜になって、人がそれぞれの部屋にもどってからそれを彼女はやってきたのだった。

でも、その夜だけは、夜になっても、いや「八時」が近づくにつれ、その仕事の手につかなかった。彼女も知っていたのである。

ここでも、どこで彼女がそれを知ったかは後にゆずるが、ふらふら、夢遊病者のように地下の洗濯場をぬけだし宿直室へやってきたのだった。そこにテレビがあるのを知っていたからであった。

しかし、「オバさんがこの時間に宿直室へくるなんて珍しいな。そうか、見たいテレビでもあるの、好きなチャンネルに廻してもいいよ」歌謡番組をみていた、夜だけの夜警アルバイトにきている学生にいわれると、もうダメだった。

「なんだか疲れたものだから」言うのがやっとだった。

午後九時半、長くて短かったその番組は終わった。谷田貝キヌ子は、ついにその番組を「見せてほしい」と言えなかった。石のように病院の宿直室の壁を見つめつづけていた。不思議と涙はこぼれなかった。

同じころ茶ノ間でも、収録をおえた録画テープを前に、グッタリ壁のむこうとこちらにもたれかかっていたまま、兄妹が、

「洋子、おまえ、明日なんといって、このテープをオフクロに見せるつもりだ」

「そうねえ、お兄ちゃんは……」

「オレな」もう隠すなよ、オレたち知ってるんだ、お母ちゃん、お母ちゃんひとりで苦しむなよ」っ

て、ポンと肩でもたたき笑いながら言ってるつもりだ」

「親子だもんね」

「オフクロは、泣くかも知れないけど、オレたち泣かないでおこうな」

「うん、もうよそうよね、泣くの。でも過去の秘密を胸の金庫のなかにひとりですまして……生きていて……お母ちゃんつらかっただろうね」

「どんな事情があったんだろう」

「そんなこと、お母ちゃんにきいたらだめよ」

「わかってる」

「ほんとに、もう、泣くのよそうね」

「おまえの眼、ウサギみたいだぞ」

「お兄ちゃんだって……」

話しあっていた。風はまだ吹きつづけていた。「紅茶いれてあげよか」洋子がたちあがったとき、卓袱台の錆色の目覚時計はもう午後十時四十分をさしていた。眼は赤かったが、もう泣いてはいなかった。

ところが、台所のガス台にヤカンをのせかけたときである。ふと、手をとめた洋子は首をかしげ、
「お兄ちゃん」

茶ノ間の新次郎に話しかけた。

「いまひょっと思ったのだけど、さっきテレビに出ていたあの人が、もし本当に私たちのお姉さん、つまり、お母ちゃんがアメリカ兵との間に生んだひとだとしたら、お母さんがあの人を生んだのは十五歳ということにならないかしら……」

「十五歳……？」

「だって、お母ちゃんはいま四十七歳よ、それから三十二歳を引いたら、十五歳じゃないの」

「すると……人違いか……」

「そんなことない、あれだけ、お母ちゃんにも、お兄ちゃんにも私にも似てるんだもの、それに顔……見ただけでピンときた、血のつながりってわかる……絶対に間違いないわ」

「しかし……まさか十五歳で……、十五歳といえば、洋子、いまのおまえと同じ年齢だぞ」

「女は……十五歳になったら、子供生むことができるのよ、これでも看護婦になるうって勉強してるのだから」

「……………」

「そうか、そうだったのか、お母ちゃん……だから……隠してたのか、つらかったんだろうな……」
いつか洋子は顔を両手でおおってまた泣きはじめていた。湯気を吹きあげヤカンの蓋がおどりだしていた。最後の方は言葉にならなかった。

M病院では、母親キヌ子は、また洗濯場へもどっていた。「なんだか心配だな今日のオバさんは。僕が手伝ってあげるよ、これでも洗濯うまいんだ」学生アルバイトの夜警さんが言ってくれるのを「だいじょうぶ」一人で、その地下の窓ひとつない作業場へもどっていたのだったが、「う、うっ……」ひとりになると、こらえようと思えば思うほど壁にうずめた顔から鳴咽がもれてくるのだった。こらはまだ午後十時をすこしまわった頃である。

「お、おまえという奴は！」

どこからか、あの時の父親の声が聞えてきた。

彼女の父親は佐藤正吉といった。明治二十三年長崎県南高来郡加津佐町から北へ、雲仙へとのぼっ

たR部落の農家の五男として生まれた男であった。五男といっても十一人「きょうだい」の八番目である。生家の姓は「宗近^{むねちか}」といったが、後に「佐藤」家へ養子にいき佐藤姓になったのだった。そしてそこで佐藤トメとのあいだに「九人」の子をつくった。

キヌ子は、この九人の中の五番目の子として、三女として生まれたのであった。

では、どこをどうたどり、この谷田貝キヌ子、佐藤正吉の三女として生まれた彼女が、横浜郊外の公営アパートに住み、夫に家出され、子供二人をかかえ病院の汚物洗いの雑役婦で生活をささえるようになったのか。

いやそれより、新次郎、洋子の兄妹が秘かに信じるように、彼女が米兵との「混血児」を生み、その子を手放したというのが本当だとしたら、どこで、どのようにしてそんなことになったのか。

これを語っていくには、彼女の父親佐藤正吉の生いたちから書いていかねばならない。

佐藤正吉、いや宗近正吉が生まれたR部落というのは、さきにふれたように、島原半島南端、長崎県南高来郡加津佐町から北へ、雲仙への山坂道をうねうね四十キロほど登りつめたところである。戸数は彼が生まれた明治二十三年も昭和五十三年の今日もかわらない。天草灘にのぞみ比較的ゆたかな半漁半農の加津佐町とくらべると、大正時代になっても「米」と名のつくものは年に数度しか口にできない部落であった。「ワシらが畑はノミの額タイ」唯一の外來者として忘れたころ訪れてくる売薬屋に、彼等はどうにもならぬ思いをぶつけていた。

彼の生家もその一軒であった。父親、すなわちキヌ子の祖父は、四反の、山にへばりついた畑でソバと麦をつくり十一人の子供を養っていた。

その部落は、二男以下に生まれた男は成人になると、いや、気のきいたのはその前に坂道をたどり家を去るのを不文律にしていた。残られると家の者が困るからであった。それより、残っても二男以

下は養子へのもらい手でもないかぎり結婚などできないのであった。さらに、「成人になると」とは「徴兵検査」を受けたらという意味だった。

いま人々は忘れかけているが、ほんの三十四年前まで、この国は、天皇の命により「国民皆兵」とされ、二十一歳になると男はすべて兵隊になることを義務とされていた。「徴兵検査」とは、そのため男全員が受けなければならぬ検査であり、全裸にされ、犬のごとく四ツンばいにされ肛門から性器までしらべられた。この二十一歳は「支那事変」「大東亜戦争」とすすみ、バタバタ兵隊が死んでいくと、十九歳まで引き上げられるが、ともかく、この検査をおえたら「酒もタバコも許す」つまり「大人」として認めるということになっていたのであった。

いまひとつ「気のきいたのはその前に」というのには、つぎのような意味があった。まず、明治四十年まで、日本の義務教育は四年まで。小学校は四年で終りだった。これが六年制になるのは翌年からである。

ただし、それではあまりにもひどいと、小学校に「高等科」なるものを併設し、希望者にながしかの教育を授けるとされていたが、これは義務でなく授業料をとっていた。

中学校へすすめるのは、その高等科授業料の数十倍もするお金を支払える中流以上の自作農か、地主の子弟にかぎられ、その数は、小学校卒業生のほんの数パーセントにすぎなかった。あとの子は金ポタンをまぶしそうに指くわえながめるだけだった。

その高等科の授業料が払えず、小学校だけであとは重い鋤をかつぎ、父親についてペコペコばったのように頭をさげながら牛や馬みたいに地主の畑を耕すしかない子も少なくなかった。その数は平均四割である。三年制の高等科を卒業すれば国鉄や郵便局の最下級ポストか巡査の試験を受けるのには有利だとわかっていても、牛や馬になるしかなかったのである。

ちなみに宗近正吉が小学校を卒業した明治三十三年の生徒数をみると、

小学校 四〇三一八二七名

高等科 九四八七七名

中学校 一〇五九三一名

(内、女子数一七五四〇名)

となっている。気のきいた者とは、この高等科も中学校も無理とわかった時点で都会へ丁稚小僧にいった少年たちということである。

では、当時の、この丁稚小僧の足どりとはどんなものだったか。おなじR部落に生まれ、明治三十三年正吉といっしょに小学校を卒業、「親にその高等科へやる金がないため」十二歳で大阪の左官屋へ丁稚小僧にいった浜田順之助の回想を参考までに紹介していくと、

「まずね、十一名の同級生のうち高等科へあがったのは四名だけだった。佐藤正吉くん、いや、当時は宗近正吉くんだが、彼は、毎朝四時に起きて山地主の所で炭運びをし、自分で授業料をかせぐという約束で高等科にいくことを許してもらっていた」

彼、浜田順之助はいまも大阪市住吉に健在で、左官業を営んでいる。

「ワシのそこは、それも許されず、隣村の山地主の作男にされることになった。作男というのはね、ほら、アメリカのテレビ映画でやってるでしょう、黒人奴隷みたいなものです、飯だけ食わしてもらって何年か契約年数だけタダで働くやつです。そのかわり親に年五円の割だったかな、前金が渡されるというやつです。そんなことなら「ええいっ、オレひとり自力で生きてやれっ」と家を飛び出したのでした」

一年半、松浦の炭鉱の飯場で走り使いをして金をため、汽車賃だけもって大阪に出たのだという。